

紀要

37

草津市・北谷古墳群L地点出土埴輪について

— 湖南地域出土埴輪資料の基礎的検討 — 辻川 哲朗 (1)

横穴式石室の構築原理を考える

— 研究ノート：岩橋型石室を題材として — 堀 真人 (15)

福林寺12号墳の墳丘測量調査報告

..... 宮村 誠二 (28)

近江出土の渡来銭貨 (2)

..... 小島 孝修 (33)

近江における中世備前焼の基礎集成

..... 山口 誠司 (49)

長浜市八雲書院資料調査報告〈瓦編3〉

..... 福井 知樹 (57)

三次元データを歩く

— 三次元データの利活用を目指して — 福井 知樹 (73)

草津市・北谷古墳群 L 地点出土埴輪について

— 湖南地域出土埴輪資料の基礎的検討 —

辻川 哲朗

目次

1. はじめに
2. 北谷古墳群について
3. L 地点について
4. 出土埴輪について
5. 埴輪の検討
6. 遺構の検討
7. おわりに

— 論 文 要 旨 —

北谷古墳群は草津市山寺町にかつて存在し、開発によってすべて滅失してしまった古墳群である。本稿は、ながらく未報告であった、古墳群内の一地点（L 地点）において出土した埴輪の内容を報告することを主たる目的とし、あわせて本資料から派生する二三の課題についても検討をこころみた。

円筒埴輪の編年上の位置付けを検討した結果、北谷古墳群の空白期である古墳時代中期後葉～末葉頃の所産であることをあきらかにした。さらに、従来定見がしめられていなかった遺構の解釈については、今回あらたに探索して見いだした出土状況図を検討した。その結果、従来は原位置をたもった「埴輪列」とされてきたが、出土状況から人為的に移動された可能性を見だし、遺構の解釈への試案を提示した。

——— キーワード

古墳時代 埴輪 北谷古墳群

1. はじめに

本稿の目的 北谷古墳群は草津市山寺町にかつて存在し、開発によってすべて滅失してしまった古墳群である。本稿は、ながらく未報告であった古墳群内の一地点（L地点）において出土した埴輪（以下、本資料）の内容を報告することを主たる目的とする。あわせて、本資料から派生する二三の課題についても検討をこころみる。

執筆の経緯 本例を今回取りあつかうにいたった経緯をのべておく。筆者は以前に近江地域の埴輪を集成し、円筒埴輪を対象として編年的検討をこころみた（辻川 2003a）。それにともなって、県内の資料を集成・実見する過程で、すくなくない数の未報告資料の存在をしった。本資料もそうした未報告資料の一つであった。

本資料については、調査後に刊行された『草津市山寺町北谷古墳群発掘調概報』（西田 1961、以下『概報』）において埴輪が出土した事実が報告されている。しかし、諸般の事情により、埴輪じたいの報告をふくめて詳細な記述がなかったこともあって、ほとんど着目されてこなかった（1）。

しかし、本資料を実見した結果、古墳時代中期の埴輪であって、現状で確認されている北谷古墳群の造営時期の「空白期」にあたる資料であることがわかった。2003年段階の集成（辻川 2003a）にくわえることができたが、その重要性を考慮して、早々に資料化し紹介することを予定していた。しかし、怠慢ゆえにながらく追加調査をできなかった。

今回、ようやく本資料を収蔵する滋賀県立安土城考古博物館のご厚意をえて実測できた。さらに、調査時に作成された図面等の資料が津市歴史博物館に収蔵されていることをしり、同館のご配慮によりそれらを実見することもできた。

本稿の内容 以下、まず古墳群の概要を昭和35年度の調査成果をふまえて確認する（第2章）。そのうえで、既往報告や、今回あらたに確認できた調査時に作成された実測図等に依拠して出土状況について確認する（第3章）。それとともに、今回実見しえた出土遺物の内容について報告する（第4章）。その所見をふまえて埴輪を検討し（第5章）、遺構の性格についても検討のうえで試案を提示する（第6章）。

2. 北谷古墳群について（図1）（2）

遺跡の位置 北谷古墳群付近は、旧郡では栗太郡にふくまれる。地形的には、琵琶湖の南東側—湖南地域にあたり、北を金勝川に、南を草津川にはさまれた、南東から北西方向にのびる丘陵（標高130～140m）上に位置したことになる。

周辺の遺跡 北谷古墳群の周辺には、栗東市下戸山古墳・地山古墳・小槻大社古墳群等の主要古墳が分布するほか、

栗太郡衙推定地である岡遺跡も北東約1kmにある。栗太郡内でも主要遺跡が集中する地域といえる。

昭和35年度の調査 昭和35年度の調査の結果、東部の金勝山からほぼ東西にのびる丘陵の稜線上に、約270mにわたって一列にならぶ11基の古墳が確認された。

【調査の経緯】 昭和35年（1960）、名神高速道路建設にともなって、この北谷古墳群が所在する丘陵が道路建設用土砂の採土地となった。丘陵上に古墳が存在することは以前から周知されていたため（3）、日本道路公団からの依頼により、滋賀県教育委員会が調査主体となり、事前に発掘調査が実施された。

【調査の経過】 調査は西田弘氏（当時、滋賀県教育委員会社会教育課主事）が担当され、第1次（昭和35年5月16日～31日）、第2次（同年7月4日～18日）、第3次（同年8月17日～9月2日）、第4次（同年10月25日～27日）の四回にわけて実施された。

【調査の地点】 調査では、まず墳丘が遺存する箇所（1号墳・11号墳）とともに、古墳とうたがわれる痕跡をとどめた地点を確認し（B～P地点）、それらを対象に調査がなされた。その結果、A・K・L・Mの5地点では古墳を確認できなかったものの、それ以外の地点では、古墳もしくはその可能性のある痕跡が確認された。

構成古墳の内容 この調査成果にもとづいて、各古墳の概要をのべる（4）。なお、古墳と判断されなかったA・K・M地点と後述するL地点、別に報告と検討が提示されている11号墳（中司他 1980）については記述を省略した。

【B地点】（1号墳）丘陵尾根先端部に位置する。墳丘が遺存し、円墳とされる。葺石・埴輪等の外表施設は確認できなかった。埋葬施設は粘土槨であり、粘土床上から赤色顔料とともに、鉄製品1点が出土した。出土遺物にとほしいため、詳細は不明ながらも、粘土槨という埋葬施設からみて古墳時代前期後半頃に位置づけておくのが穏当であろう。

【C地点】（2号墳）横穴式石室の存在を想定して調査区を設定したところ、石材等はまったく遺存していなかったものの、石室基底部と推定される整形された面上から土器片・鉄製品の残片が出土した。

【D地点】（3号墳）盛土状をなしていたため調査区を設定したが、若干の古式土師器片が出土したのみであった。調査終了後に、採土工事作業のさい、この付近から石材や土器片が出土したとの報告があったという。西田氏は、本来石室墳が存在したが、丘陵斜面崩落時に石室も崩落し、調査した盛土部分は残存墳丘の一部と推定している。

【E地点】（4号墳）墳丘は遺存せず、横穴式石室のみが確認された古墳である。

横穴式石室は、右玄門部から右羨道部にかけてうしなわれ、袖形態を確定できない。開口方向は南西側である。玄室は、長さ4.3m・幅（奥壁側）1.45m・同（玄門側）1.8

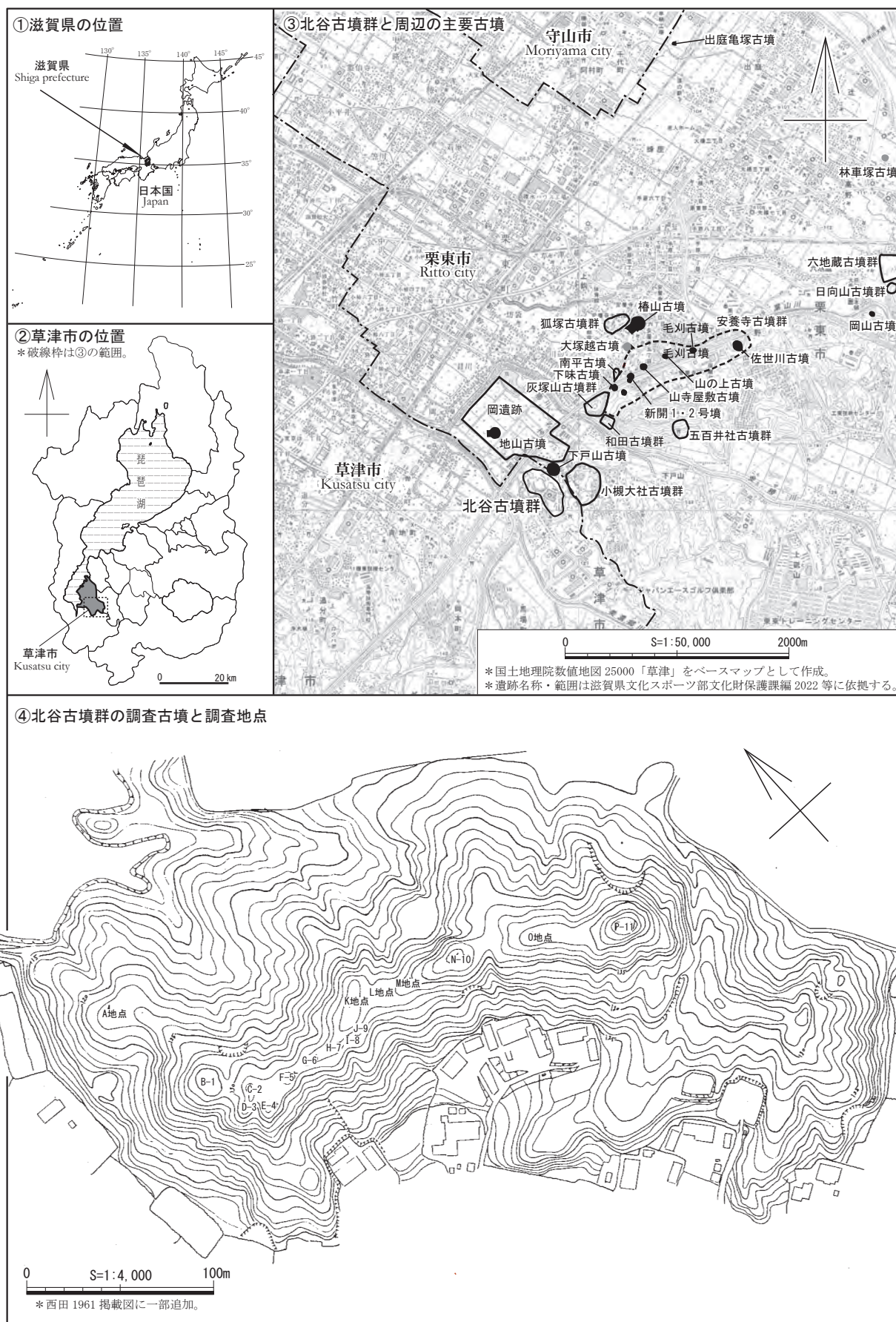


図1 北谷古墳群の位置と内容

mであり、平面形態は台形を呈する。玄室の壁面構成は、奥壁側が最下段に大きな石材2石を縦置き、それ以上は小ぶりの石材を積みあげる。一方、側壁は最下段から小ぶりの石材を横積みする。玄室床面には礫敷がみとめられた。

遺物は比較的良好に遺存しており、石室内から装身具（金環2・銅環2、硬玉勾玉1・碧玉管玉2・ガラス小玉5）、鉄器（鉄刀2・鉄鏃10・刀子9・鉄釘等）、須恵器・土師器が出土した。

【F地点】（5号墳）墳丘は遺存せず、横穴式石室のみが確認された古墳である。

横穴式石室は右片袖式で、南西側に開口する。天井石一石が原位置で遺存し、石室内に一石が落ちこんでいた。奥壁は比較的良好に遺存していたが、左右側壁の大半がうしなわれていた。玄室は長さ3.3m・幅1.6m・高さ1.9mである。玄門付近に一石が横置されており、羨道床面との間に約0.25mの段差を形成する。玄室の壁面構成は、最下段に比較的大きな石材を縦置きする。床面には礫敷が一部遺存していた。

遺物は、石室内から装身具（金環2・銀環2・ガラス小玉1・琥珀琺瑯玉15）、鉄器（鉄刀1・鉄鏃11・刀子3）、馬具（鉄製楕円形鏡板付轡・雲珠等）、青銅器（銅鏃1）のほか、須恵器・土師器が出土した。頭蓋骨等も二体分出土している。

【G地点】（6号墳）墳丘は遺存せず、横穴式石室だけが確認された古墳である。

横穴式石室は、右側壁側に袖が形成されている。一方、左側壁側は判然としないため、袖形態を確定しがたい。南南西側に開口する。玄室の壁面構成をみると、奥壁は、最下段に大ぶりの石材を縦置きしたうえに、小ぶりの石材を積みあげている。左右側壁のうち、比較的良好に遺存していた左側壁では、最下段に比較的大きな石材を横置きしたうえに、小ぶりの石材を積みあげている。玄室は長さ4.2m・幅1.5m（奥壁側）・幅1.7m（羨道側）・高さ1.8m程度である。

遺物は、石室内から装身具（金環2・銀環4、水晶製切子1・琥珀玉2・ガラス小玉6・金銅製小玉1・土玉41）、鍍金された馬具（雲珠等）、須恵器・土師器が出土した。

【H地点】（7号墳）墳丘は遺存せず、横穴式石室だけが確認された古墳である。

横穴式石室は、天井石がすべてうしなわれ、側壁も最下段をのこすのみであった。石室の平面形態は右片袖式であり、南南西側に開口する。西田1992では石室平面図のみが提示されたが、壁面の状態は不詳である。遺構写真から判読すると、奥壁は最下段に大ぶりの石材を縦置きしていたようである。玄室床面には「玉砂利」（西田1992、p.99）を敷きつめていた。玄室床面には、中央部から羨道にむけて、幅0.3mの溝をもうけ、その内部に割石や自然石をな

らべた排水溝が検出された。玄室は長さ4.3m・幅1.8m・高さ不明である。

遺物は、石室内から馬具（素環式轡）、鉄器（飾り大刀金具〔銀象嵌把頭・鞘金具〕）、須恵器が出土した。

【I地点】（8号墳）横穴式石室の存在が推定された箇所であった。調査の結果は、整面された床面に石材が散乱し、その間から鉄器と若干の須恵器破片が出土するにとどまった。調査者は、本来の石室が破壊された痕跡と判断している。

【J地点】（9号墳）墳丘は遺存せず、横穴式石室のみが確認された古墳である。

横穴式石室は左片袖式と目され、おおむね南西側に開口する。石室は、下部付近まで壁面がうしなわれていた。天井石と目される二石が石室内に落ちこんでいた。

石室の壁面構成についてみると、奥壁は最下段のみ遺存し、比較的大ぶりの石材二石を縦置きしていた。一方、左右側壁は大半がうしなわれていたものの、比較的遺存する左側壁をみると、小ぶりの石材を横置きするが、袖部と羨道部は比較的大ぶりの石材を縦置きする。床面には礫敷が一部遺存していた。玄室は長さ3.3m・幅1.5mで、高さは不明である。羨道は幅0.8m、長さは2mをはかるが、それより外方はおおきく崩落していたとする。

遺物は、石室内から装身具（銀環2、土玉6）、鉄器（鉄鏃8等）のほか、須恵器・土師器が出土した。

【N地点】（10号墳）当初墳丘らしき高まりがあり、その頂部に既掘坑と目される凹部が確認されたため調査したところ、地表下約1.8m付近で、石室床面の敷石と目される石材10点とともに土器片が出土した。以上から、破壊された石室の残骸と調査者は推定している。

古墳群の造営時期 以上から、昭和35年度調査で確認された古墳は、2基の前期古墳（1・11号墳）を除外すると、それ以外の9基はすべて横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳である。つまり、調査成果にもとづくかぎり、北谷古墳群は前期後葉頃の11号墳の築造を端緒とすることになる。1号墳と11号墳の先後関係は判然としないものの、さほど離れた時期ではないとみてよいだろう。その後、古墳時代中期に相当する古墳は見いだせない。ふたたび造墓が開始するのは古墳時代後期になってからであり、横穴式石室を埋葬施設とする古墳群が丘陵上に展開する。

後期諸古墳の特徴 それらの石室のなかには金銅装馬具を有する例（6号墳）、鉄製武器・馬具・装身具を完備する例（5号墳）、馬具とともに銀象嵌把頭の大刀を有する例（7号墳）もあって、後期群集墳内でも有力古墳と目される（細川1996）。石室構造からみても、壁面構成が腰石状を呈する5号墳では、いわゆる「突起石」の装置が確認されるなど、当該地域でも特異な事例をふくんだ古墳群といえる。

3. L 地点について

位置と地形（図 1） 本資料は、L 地点とされる箇所で見出された円筒埴輪である。この L 地点は、丘陵稜線のほぼ中央部付近に位置する。この付近は、南東側にすすむと、M 地点をへて高まり（N 地点）がある一方、北西側にもゆるやかな高まり（K 地点）があって、両者にはさまれた当該地点は鞍部をなしている。稜線上とはいえ、比較的平坦な地形を呈し、地形図からは明確な古墳の痕跡は看取できない。

出土の状況（図 2） 遺物出土状況について、調査日誌や既往報告等にもとづき、調査者の認識を確認しておく。

【調査日誌】調査を担当された西田氏の蔵書・関係資料は、西田氏の没後に大津市歴史博物館に寄贈された。今回、その資料のなかに、北谷古墳群調査にかんする資料を見出すことができた。さいわいにも、そのなかには、西田氏が調査ときに作成された調査日誌（以下、『調査日誌』）がふくまれていた。これらは調査の実態をしる重要な手がかりであり、『調査日誌』から当該地点の調査状況を以下に抜書した。

〔8 月 17 日（水）〕「12 号墳表土をとる 円筒埴輪列の一部を検出 埴輪列と同じ高さで地山をやゝくほめ腐植土の□□□中に一□の須恵器出土 石室一部らしき石組を発見」〔引用者註：□は判読困難な文字をしめす〕。

以上の記述から、円筒埴輪列が見出されたこと、須恵器が出土したこと、石室の一部と目される石組を確認され、この段階では古墳の可能性が想定されていたことがわかる（5）。

〔8 月 18 日（木）〕「12 号墳 埴輪列検出 石組みは石室ではないことが判明 なお須恵器類が散在している」。

〔8 月 19 日（金）〕「12 号地点 埴輪列の検出」。

昨日の調査結果から、古墳とは判断されず、呼称も 12 号墳から 12 号地点に変更されている点が注目される。

〔8 月 20 日（土）〕「12 号地点 実測図作製 遺物を取り上げ」。

〔8 月 21 日（日）〕「12 号地点 セクションの□前の溝を掘る。表土下直□に地山がある」。

〔8 月 22 日（月）〕「12 号地点 実測（平面及セクション）」。

この日以降、L 地点の関連記述は見あたらないから、8 月 22 日をもって当該地点の調査は終了したのであろう。当該地点の調査期間は合計 6 日間にわたり、土日関係なく作業が継続されていたことになる（6）。

【『概報』の報告内容】調査後まもなく刊行された『概報』では、L 地点について以下のように報告されている。

「封土もなくほぼ平坦な東西約一〇米南北約七米の部分で、表土の下はすぐ地山である。その北よりに約八米にわたり、円筒埴輪が一行に並び、更に南寄りにも円筒埴輪の破片が数個発見された。その間に土器が散在しているが、その数は多くなく、完形品は有蓋杯一合のみで、出土の際

は身と蓋は少し離れていた。この須恵器は時代が新しいと思われ埴輪との関係は不明である。その他古い土師器も出土し、遺跡の性質は全く不明である。鉄器も少量出土している」（西田 1961、p. 5）。

後に調査者も吐露しているように（西田 2001、p.92）、十分な整理調査期間を確保できなかったため、『概報』では、簡潔な事実報告にとどまり、各遺構実測図や出土遺物の実測図等が提示されなかったことは残念であった（7）。

【西田 1992 の報告内容】調査者である西田氏はその後も個人的に整理調査を継続され、遺構実測図と出土遺物実測図とともに、その成果を 1992 年に公表された（西田 1992）。しかし、本資料については実測図の提示はなく、L 地点関連遺構図も提示されなかった。ただ、本文には L 地点にかんして、以下のように記述されている。

「K 地点より南東約一〇m ほどのところにちょっとした平坦面があった。これは南北約七m、東西約一〇m ほどのもので、表土を除くとすぐ地山となった。この平坦地の北やや東よりから南西にかけて約八m にわたり円筒埴輪が一行に並んでいた。埴輪はなお南東側に数個散乱していた。これらの円筒埴輪の間には古式土師器の小破片や鉄製品の小破片が少量散乱していたが、その中に須恵器の完形品として白鳳時代のもと思われる杯の身と蓋の一对が発見された。杯身には高台があり、杯蓋には宝珠つまみのあるもので、出土時には約 1 m ほど離れて発見されたが、明らかに一对のものである。この土器は埴輪とは時期を異にしており、その関係は不明である」（西田 1992、pp.100-101）。

以上の記述から判明する点を箇条書きにまとめた。その内容は『調査日誌』の記述とおおむね一致することがわかる。

- ①地点の形状は、丘陵上にある南北 7 m × 東西 10 m 程度の平坦面である。
- ②平坦面上では、表土直下の地山上で平坦面の北やや東よりから南西にかけて約 8 m にわたり円筒埴輪が一行にならんでいたほか、さらに南東側には埴輪が散乱していた。
- ③円筒埴輪の間には、「古式土師器」や鉄製品の小破片が出土したほか、須恵器杯蓋の蓋・身のセットが出土した。
- ④埴輪列周辺で出土した須恵器杯蓋は宝珠つまみを有し、埴輪より後出するもので、両者の関係は不明。

この遺構について、西田氏は「現在ではこの埴輪列の意味は、（略）不明として大方の御教示を待つ」（西田 1992、p.101）として、解釈を保留した。

【西田 2001 での認識】西田氏は、その後の講演のなかで、L 地点について以下のようにのべている。

「この L 地点は馬の背のようになった地形で、片方はストーンと落ちてしまっているのですが、もとはずっと続いていたと思います。それが山崩れでなくなってしまっている。周りに土を盛ったようなところはどこにもないわけです。だからこれは古墳の周りとは考えられず、「これが何を

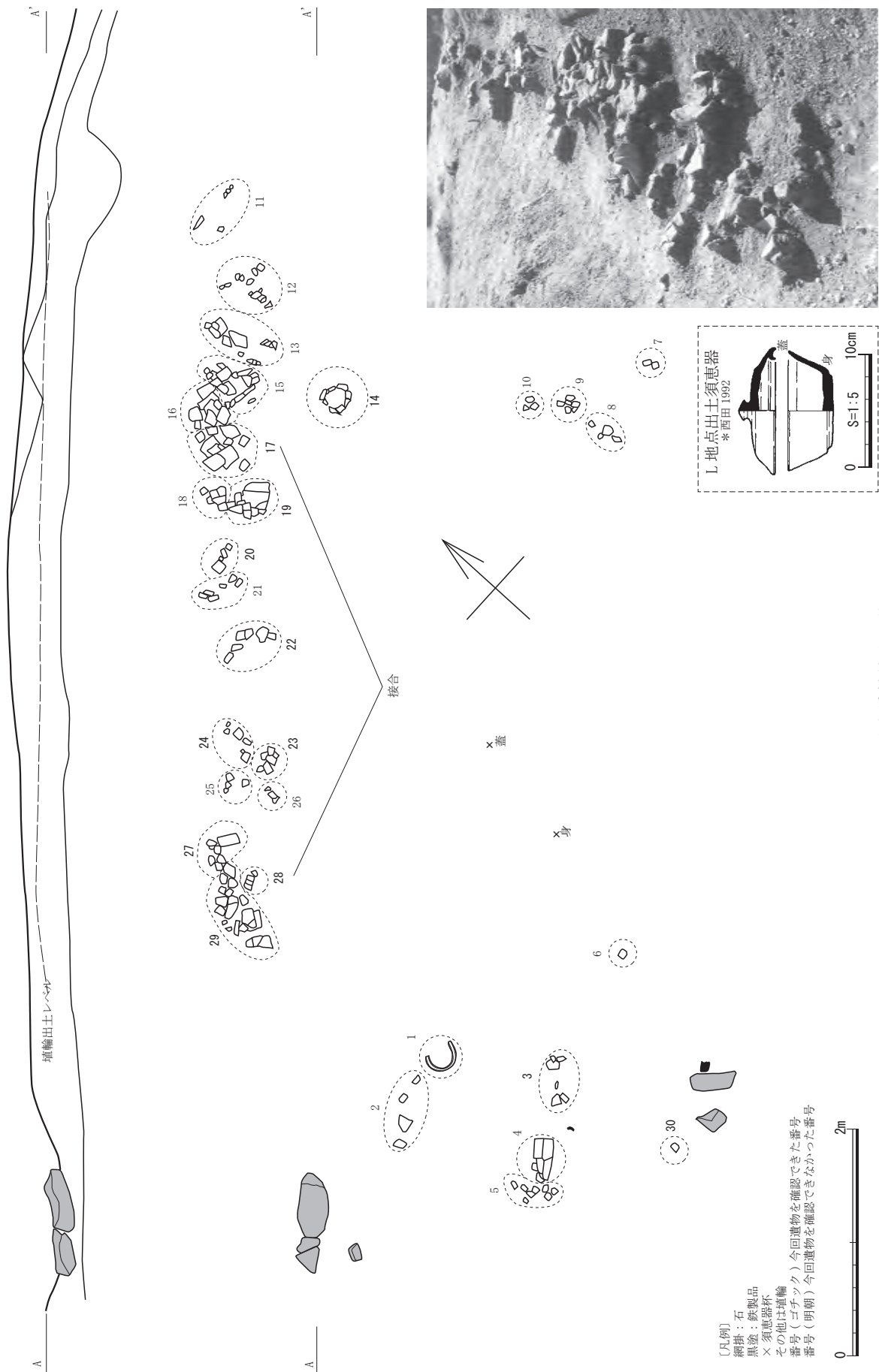


図2 L地点埴輪等出土状況図

※大津市歴史博物館所蔵西田資料から辻川製図、一部加筆。

意味するのか」（西田 2001、p.11）不明であるとした。

これらの記述内容は西田 1992 段階の認識とほぼ同様である。つまり、埴輪列の周辺には盛土の痕跡が確認できなかったことから、古墳を推定することができず、それゆえ埴輪列の意味は不明であるという。

【出土状況図】『概報』や西田 1992・2001 の本文記述以外に、L 地点での埴輪等の出土状況を具体的に示す手がかりは『概報』に掲載されていた遺構写真 1 カット（写真 1）しかなかった。今回、大津市歴史博物館収蔵の西田氏資料のなかに、この L 地点での出土状況図を見いだすことができた（図 2）。以下、この出土状況図から、埴輪等の出土状況を確認しておく。

出土状況図は、埴輪・鉄製品・須恵器・石等の出土状況をしめす平面図と、埴輪出土地付近を横断する断面図からなる。俯瞰的にみると、埴輪の出土は北西側・北側・南側の 3 つのまとまりに大別でき、それらに囲まれた空間には須恵器蓋杯（図 2）等が出土している。以下、各まとまりを概観する。

一つ目は、北西側に直線的にならぶ一群である。これを北西群と仮称する。埴輪は平面的なまとまりでグルーピングされ、それぞれに取り上げ番号と目される数字が付されている。この北西群は、北東端の 11 から南西端の 29 まで 19 のグループからなる。そのうち、15～19 付近は比較的破片がおおく、規模の大きな破片をふくむ。また、14 は円形に破片がめぐっており、円筒底部の可能性もある。さらに、27～29 付近も比較的破片が集中している。ちなみに、『概報』掲載の遺構写真は北西群を撮影したものであるが、撮影方向を確定するにはいたらなかった。

二つ目は南側にある一群である。これを南群と仮称する。西端の 1 から南東側へ 6 まで散在し、さらにその南端に 30 がある。1 は半円形に図示され、円筒底部かもしれない。

三つ目は北側の一群である。提示された破片数は北西群や南群に比して少量で、破片も小規模である。東端の 7 から西へむけて 8・9・10 がならぶ。

一方、断面図は、北西群を南西から北東に見とおして作成されたようであり、低平な台形と、その中途付近に水平方向に破線がひかれ、「埴輪出土レベル」と注記されている。台形の上端ラインが地表面、下端ラインが地山と目される。その間には、北東側に別の 1 層が表現されているが、層名等の情報は記入されていなかったため、詳細は不明である。

4. 出土埴輪について（図 3・4）

出土遺物 『概報』や西田 1992 等の既往報告から、L 地点出土遺物を確認すると、埴輪（円筒埴輪）・「古式土師器」・「白鳳時代の」（西田 2001、p.11）の須恵器・鉄製品の残片となる。

報告対象 これらのうち、今回確認したのは埴輪のみで

あった。以下、埴輪にたいする資料調査の結果をふまえて、その内容を記述する。

資料の現状 すべて円筒埴輪（普通円筒埴輪・朝顔形埴輪）であり、形象埴輪は見いだせなかった。その量は整理用コンテナ約 3 箱である。

【資料の現状】資料は水洗され、接合作業の後に一部石膏による復元も実施済みであった。また、接合個体以外の破片は複数のビニール袋におさめられていた。

【注記の内容】接合個体ならびにビニール袋には、墨書・マジックにて「12」もしくは「12-○」という注記がなされていた。「12」については、先述したとおり、当初この L 地点が「12 地点」と呼称されていたことを考慮すると、「12 地点」を意味するとかんがえる。「12」につづくのは数字もしくは「南側」・「北側」である。数字は出土状況図に記入された埴輪の個体番号（1～30）に相当し、「南側」・「北側」は出土位置をさし示すとみておくのが穏当であろう。

【資料の内容】それを前提として、遺物に付された取り上げ番号を確認したところ、12・2・3・14・16・17・19・20・22・23・24・27・28・29・30・南側・北側を見いだせた。これ以外に「12」とする袋もあった。数字については、出土状況図の個体番号と符合し、さきの想定を裏づけている。ただ、出土状況図にあつて資料にない番号（1・4～13・15・18・21）があることには留意しておきたい。今回見いだした本資料が取りあげられたすべてではないことを示唆するからである。

埴輪の報告 以下、各資料の内容について報告をすすめていきたいが、それにさきだち、共通する属性である胎土・焼成・色調についてまとめておいておく。

【胎土】粘土は精良で、直軸 1～2 mm 程度の長石・石英等の重角礫や赤色粒をふくんでいる。

【焼成】確認できた破片はすべて土師質無黒斑品であり、窖窯による焼成とわかる。全体にやや軟質に焼成されているため、摩滅が進行し、器面痕跡を確認しがたい例がおおい。

【色調】資料のなかに、色調のバリエーションは見いだせず、おおむね一様といってよい（8）。内外面は黄橙色（10YR8/6）～明黄褐色（10YR8/7）等を基調とする。破断面についても、表裏面と顕著な色調変化は認められない例がおおい。ただ、後述するように 1 点のみ、表裏面に比して破断面内部が暗色を呈する例（21）がある。

【報告の方法】先述したとおり、埴輪は取り上げ番号ごとに袋におさめられていた。そのため、実測にあたっては、まず袋単位で破片を通覧し、そのなかから口縁部・突帯・スカシ・底部といった特徴をしめす破片を抽出し、実測対象とした。ただ、一つの袋内にことなる器種・個体がふくまれる場合があった。以下、基本的に取りあげ番号順に記述するけれども、ことなる器種・個体がふくまれる場合には、その点をしるしたうえで、両者ともに提示するように

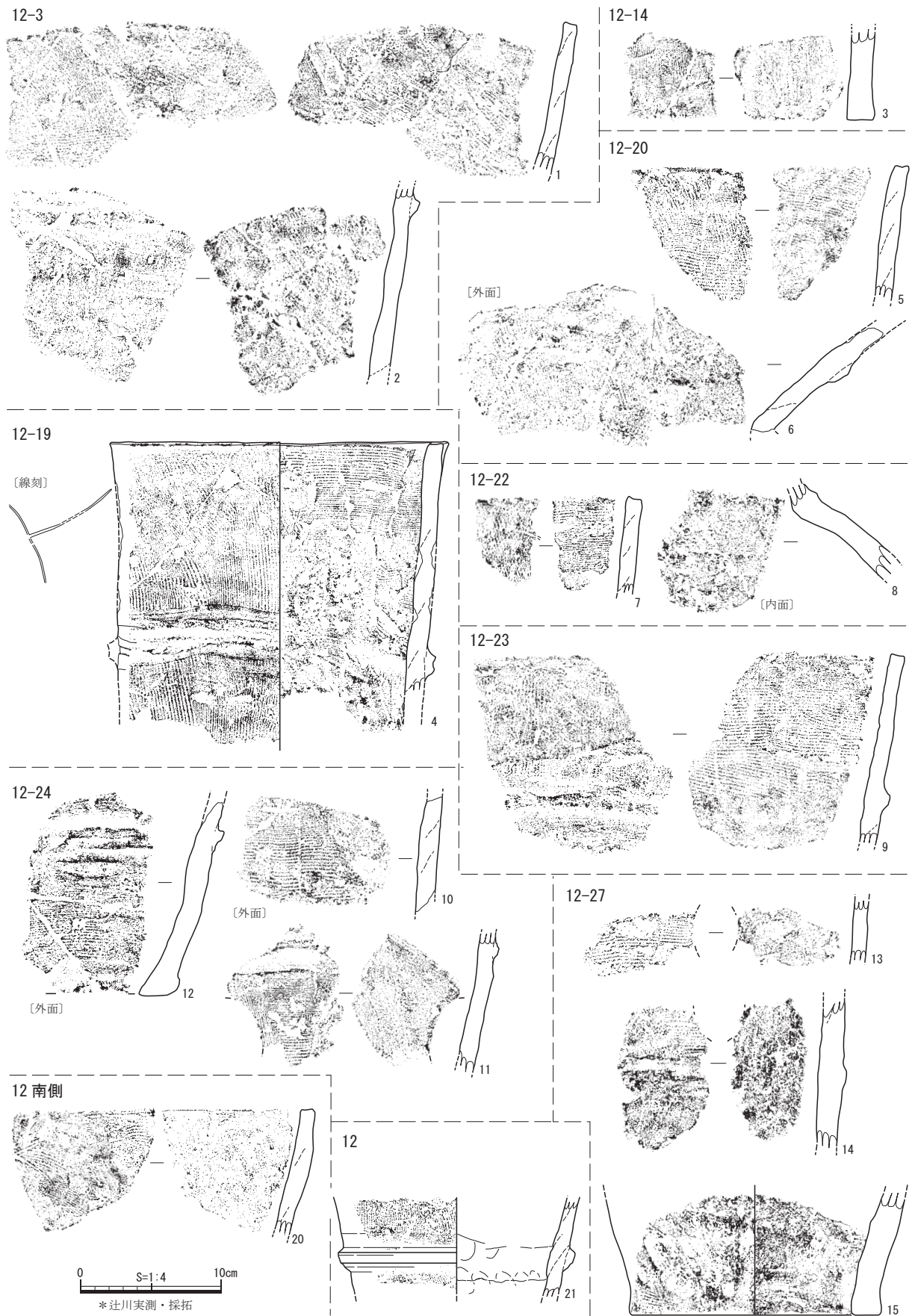


図3 北谷L地点出土埴輪実測図(1)

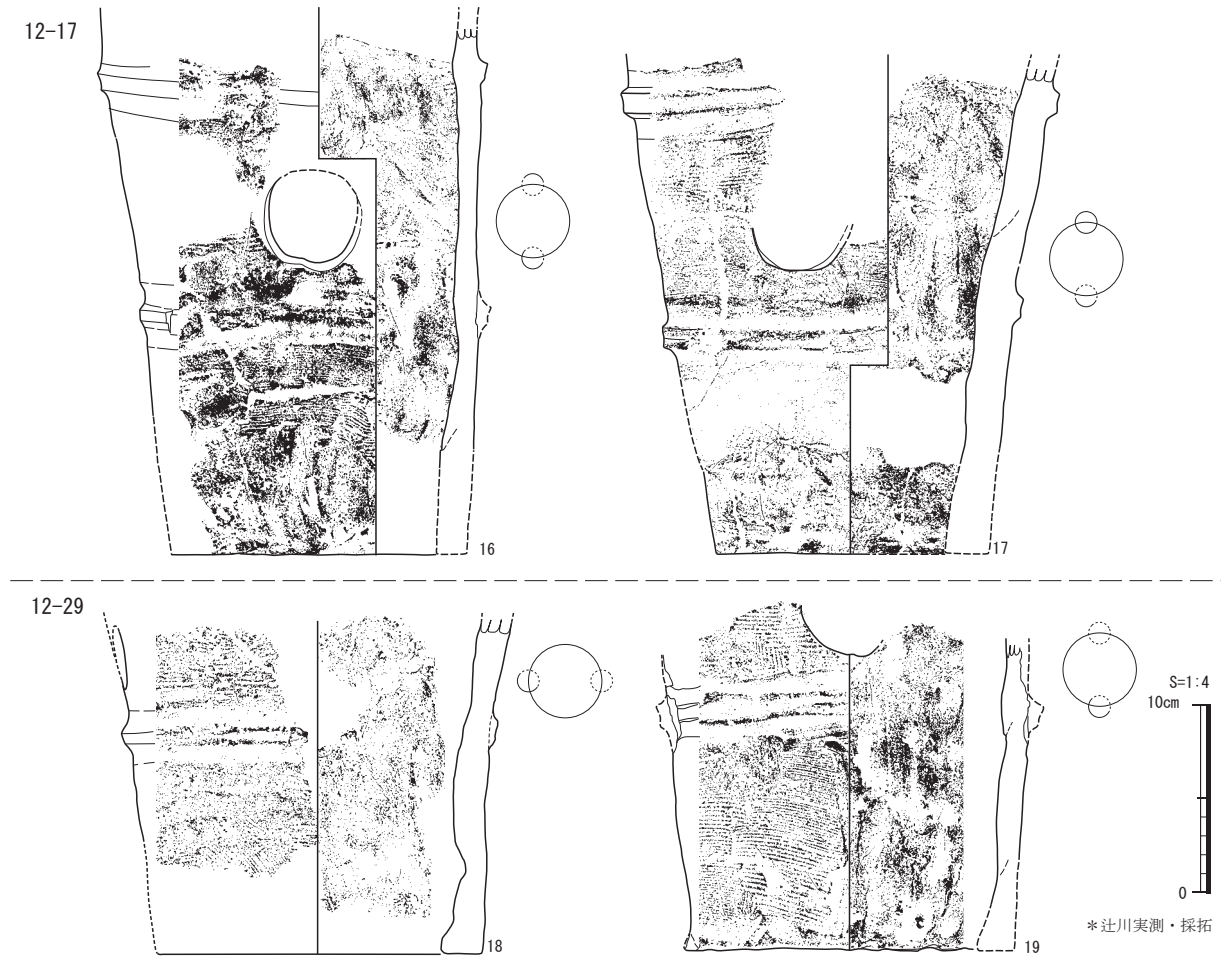


図4 北谷L地点出土埴輪実測図(2)

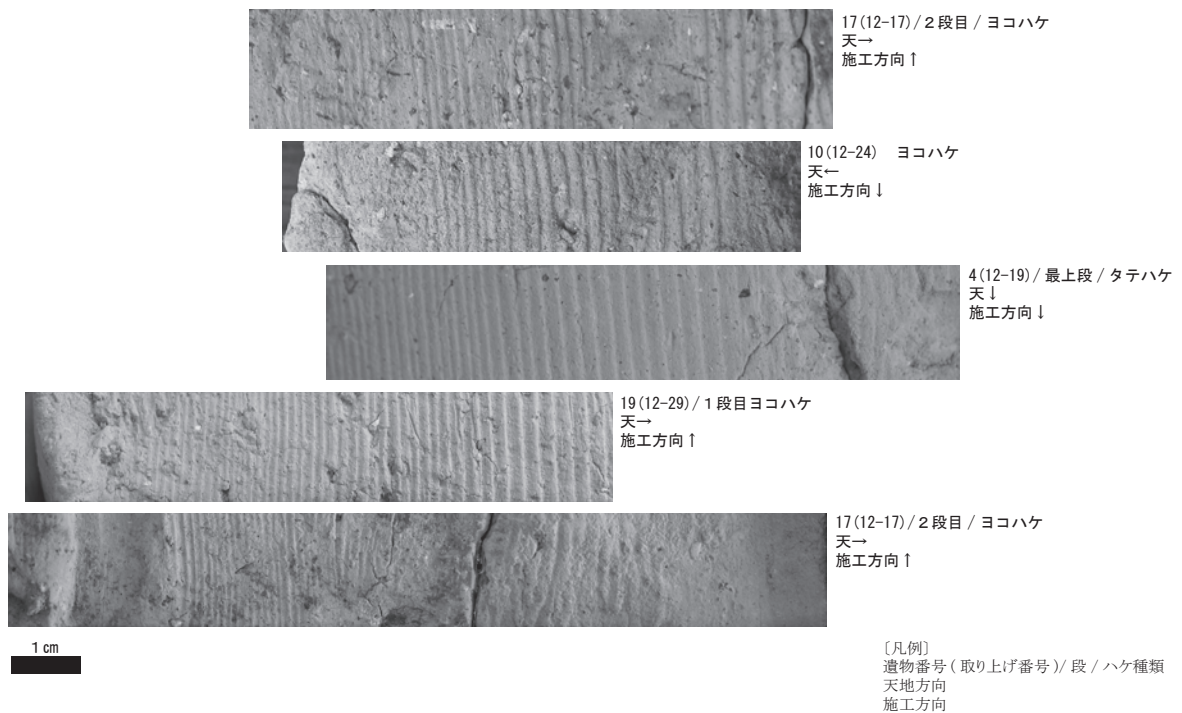


図5 各個体のハケメ比較 *辻川撮影

した(9)。

〔12-3〕(図3-1・2) 普通円筒埴輪口縁部(1)、円筒埴輪突帯・体部(2)の2点を図示した。

1は、口縁部がやや外方に直立気味にのび、上端に面をなしておさめる。外面は左傾ナナメハケ(原体密度5本/cm)で調整したのち、下半にヨコハケ(原体密度5～8本/cm)をくわえている。内面はナデ調整する。口径を復元すると20cm程度になるが、遺存部の口縁が歪んでいる可能性があり、参考値にとどまる。

2は、突帯部を含む体部片である。突帯断面形状は低平な台形を呈する。外面調整は、タテハケ調整後にヨコハケ調整をくわえている。一方、内面調整は、下半部が磨滅のため不明であるが、上半部は左傾ナナメハケ調整する。

〔12-14〕(図3-3) 円筒埴輪底部片1点(3)を図示した。

3は、小片のため、底径を復元できなかった。外面はナデ後に上半部をタテハケで調整する。内面は底端部付近からタテナデで調整している。明確な底部調整痕跡は確認できない。

〔12-17〕(図4-16・17) この取り上げ番号を付したのものには、円筒埴輪底部片2点(16・17)がある。

16は、底部から3段目まで遺存する円筒埴輪である。その法量は底径約15.5cm・底部高12.5～13.3cm・2段目突帯間隔12.0～12.5cmである。2段目に円形スカシを配する。スカシは遺存状態から1孔のみ確認したが、本来は1段2孔配置が想定できる。突帯は、断面形状がやや低平な台形を呈する。1・2条目の突帯剥離面に凹線を確認できた。突帯設定指標と目される。底端部付近の器厚は1.5cm程度とぶ厚く、明確な底部調整痕跡は確認できない。

外面調整については、底部をみると、左傾ナナメナデによる調整後、上半部にB種ヨコハケ(原体密度7～10本/cm)をくわえる。2段目は段間全体にB種ヨコハケ(原体密度4～10本/cm)をほどこす。静止痕は2か所で確認できた。その間隔は約5cmである。静止痕角度(10)は約R14°である。わずかにのこる3段目にはヨコハケメが確認できた。内面は、底端部付近にオサエ痕跡があり、それより上部は左傾ナナメハケにより調整する。

17は、底部から3段目まで遺存する円筒埴輪である。本例は「12-17」と注記された破片が主体をしめるが、一部に「12-28」の破片が接合している。

法量は底径約14～14.5cm・底部高12.5～13.5cm・2段目突帯間隔12.8cmである。2段目に円形スカシを配する。突帯の断面形状は第1・2条ともに低平な台形である。

外面調整は、底部の場合、外面をヨコハケ(原体密度6～8本/cm)で調整するが、これに先行する一次調整については明確な痕跡を確認できなかった。2段目は、タテナデ調整後にB種ヨコハケ(原体密度6～8本/cm)をほどこす。静止痕は規則的でなく、静止痕角度は約R15°であった。内面はタテナデを基調とし、突帯裏面付近に突帯貼付

時のオサエ痕跡がのこる。底端部付近の器厚は1.5cm程度とぶ厚く、明確な底部調整痕跡は確認できなかった。

〔12-19〕(図3-4) 普通円筒埴輪の最上段突帯から口縁部にかけての破片1点(4)を図示した。法量は、口径が約24cm、口縁部高が15.3～15.5cmである。口縁部はほぼ直立し、上端に面をなしておさめている。突帯は断面形状が低平なM字形を呈し、剥離面には凹線がみとめられた。突帯設定指標と目される。外面はタテハケ(原体密度6～8本)調整による。内面はナデ調整の後、下半を左傾ナナメハケ(原体密度6～8本/cm)で、上半をヨコハケ(原体密度6～8本/cm)で調整する。外面にはヘラ状工具によるヘラ記号がある。

〔12-20〕(図3-5・6) この群には、普通円筒埴輪口縁部片(5)と朝顔形埴輪口縁部片(6)が見いだせることから、複数個体が一緒に取りあげられたことはあきらかである。

5は直立気味に立ち上がり、上端部に面をなしておさめる。外面はタテハケ調整後、ヨコハケを施す。また、内面は下半にナデ調整を、上半に左傾ナナメハケ調整をほどこす。

6は朝顔形埴輪の一次口縁部から二次口縁部にいたる破片であり、上部外方へ直線的にのびる。外面には突帯を貼付する。突帯断面形状は低平な台形を呈する。調整は、外面をタテハケ(原体密度5本/cm)で調整する。内面は摩滅のため、詳細をしりがたい。

〔12-22〕(図3-7・8) この群にも、普通円筒埴輪口縁部片(7)と朝顔形埴輪片(8)が見いだせることから、あきらかに複数個体が一緒に取りあげられている。

7は直立気味に立ち上がり、上端部に面をなしておさめる。外面はタテハケ(原体密度4本/cm)調整の後にヨコハケ調整(原体密度7～8本/cm)をほどこす。一方、内面はヨコハケ(原体密度7本/cm)で調整する。外面にはヘラ状工具により横方向の一条線をひいている。

8は朝顔形埴輪肩部～頸部の破片である。器厚は約1.5cmとぶ厚い。頸部には、断面形態が低平な三角形を呈する突帯が付される。外面の調整は摩滅のために不詳であるが、内面はヨコハケ調整による。

〔12-23〕(図3-9) 普通円筒埴輪の口縁部～突帯部にかけての破片1点(9)を図示した。

9は、口縁部がナナメ上方にむけて立ちあがり、上端部に面をなしておさめる。口縁部高は約10cmである。突帯は、断面形状が台形を呈する。

調整は、外面をタテハケ(原体密度4～5本/cm)で、内面をヨコハケ(原体密度5～6本/cm)で調整する。

〔12-24〕(図3-10～12) 円筒埴輪片3点を図示した。これらは接合しないものの、色調等の特徴から同一個体の可能性が想定できる。

10は体部片である。外面はナデの後、B種ヨコハケ(原体密度5～8本/cm)で調整する。静止痕角度はほぼ0°で

ある。内面は摩滅のため調整の詳細は不明であった。

11は突帯・スカシをのこす体部片である。突帯は、断面形状が低平な台形を呈する。突帯下の段には、円形スカシの一部がのこる。外面調整は、タテハケ（原体密度5本/cm）調整後にヨコハケ（原体密度5～8本/cm）をほどこす。内面は摩滅しており、調整は不明である。

12は1条突帯から底部にかけての破片である。底径は復元しがたい。底端部付近は自重による歪みがある。突帯は、断面形状が低平な台形を呈する。外面はヨコハケ（原体密度5～8本/cm）で調整する。内面調整は摩滅のため不詳である。

〔12-27〕（図3-13～15）円筒埴輪片3点を図示した。これらは直接接合しないが、同一個体の可能性がある。

13は円形スカシの一端をのこす体部片である。外面はヨコハケ（原体密度5～6本/cm）で、内面はナデで調整する。

14はスカシ・突帯付近の体部片である。突帯は、断面形状がきわめて低平な台形である。突帯の上方に円形スカシの一端がのこる。外面はヨコハケ（原体密度5本/cm）で調整する。内面の調整は摩滅のため不明である。

15は底部片である。底径は17.6cmに復元できる。器厚は1.5～2.0cmとぶ厚い。外面はナデ調整後にヨコハケ（原体密度5本/cm）をくわえる。内面は左傾ナナメハケ（原体密度5本/cm）をほどこす。

〔12-29〕（図4-18・19）取り上げ番号「12-29」と注記された円筒埴輪を2点（18・19）確認した。

18は底部から2段目まで遺存する円筒埴輪である。法量は底径約17cm・底部高11.0～12.3cmである。2段目には円形スカシ1孔を確認したが、本来は1段2孔配列と推定する。突帯断面形状は低平な台形である。底端部付近の器厚は1.5cm程度と厚く、明確な底部調整痕跡は確認できなかった。

外面調整は、外面をヨコハケ（原体密度8～10本/cm）で調整後、一部に左傾ナナメハケをくわえる。2段目もヨコハケで調整する。内面は左傾ナナメナデ調整を基調とするが、一部に左傾ナナメハケ（原体密度5本/cm）をほどこす。

19は底部から2段目まで遺存する円筒埴輪である。法量は底径約17.5cm・底部高13.0～13.5cmである。2段目に円形スカシを配する。スカシは遺存状態から1孔のみ確認されたが、本来は1段2孔配置を想定できる。突帯断面形状は台形を呈する。突帯剥離面には2条の凹線を確認できた。突帯間隔設定指標である。

外面調整は、タテハケ（6～8本/cm）調整後、ヨコハケ（原体密度5～7本/cm）をくわえ、さらに一部にタテナデをほどこす。ヨコハケの施工は、器面からの離脱と器面への接面を繰り返しながら、上からみて時計回りに施工する。内面はタテナデを基調とし、突帯裏面付近に突帯貼

付時のオサエ痕跡がのこる。明確な底部調整痕跡は確認できない。

〔12-南側〕（図3-20）20は普通円筒埴輪の口縁部の破片である。口縁部はやや上方に直立気味にのび、上端に面をなしておさめる。外面にはヘラ記号をしめす。調整は、外面を左傾ナナメハケ（原体密度8本/cm）で、内面をナナメナデにより調整する。

〔12〕（図3-21）21は、突帯部をふくむ円筒埴輪体部片である。突帯断面形状は台形である。調整については、外面をタテハケで調整し、内面をナデ・オサエによって調整する。内面に粘土紐接合痕跡を明瞭にのこす点や、破断面の中央部が表裏面より暗色を呈する点等で他個体と相違する。

5. 埴輪の検討（図3～5）

特徴の整理 検討に先だち、確認できた本資料の特徴を簡条書きで整理しておく。

- ①器種：確認したのはすべて普通円筒埴輪と朝顔形埴輪であり、明確な形象埴輪は見いだせなかった。
- ②段構成：全形をうかがえる事例がなく、確定しがたいが、各部法量からみて、3突帯4段構成品程度の小型品である可能性がたかい。
- ③法量：各部法量は口径約24cm・底径約14.5～17.5cmで、全高は不明である。口縁部高は約10.0・15.5cm、突帯間隔約12.0～12.8cm・底部高約11.0～13.5cmである。器厚については、体部で約1.5cm、底端部では約2.0cmにおよぶ例があり、総じてぶ厚い印象をうける。
- ④スカシ：確認例はすべて円形スカシであり、段間に2孔配置される。2段目にはスカシ配置が確実に確認できるが、3段目でのスカシの有無は確定できなかった。
- ⑤外面調整：以下のバリエーションが認められた。一次調整ナナメナデのみ。一次調整タテハケのみ。一次調整タテハケ→二次調整ヨコハケ、ヨコハケは原体の静止痕を確認できない例と、静止痕を確認できる例（B種ヨコハケ）がある。先述のごとく、前者は、原体が器面からの離脱と器面への接面を繰り返しかえしつつ施工される。一方、後者のB種ヨコハケは、静止痕が規則的でなく、段間でも明瞭な部分と不明瞭な部分があり、原体を規則的に静止させる意図が希薄である。さらに、これらのヨコハケは、原体幅が突帯間隔よりもせまく、段下半部からはじめて途中で上半部にあがり一つまり、螺旋状に施工する。
- ⑥内面調整：タテナデないし左傾ナナメナデを基調とする。
- ⑦ハケ原体：外面調整のハケメを個体ごとに比較した結果、複数の個体間で共通するハケメが確認された（図5）。同一もしくは同じ原材から採取されたハケメ原体が製作に使用されたとかんがえられる。
- ⑧突帯：断面形状には台形・M字形があるが、いずれも低

平である。貼付にあたり、押圧技法や断続ナデ技法は確認できない。突帯剥離面に一重凹線・二重凹線が確認できるので、B手法（辻川 2003b）による突帯間隔設定とわかる。

⑨焼成：黒斑を確認できる破片はなく、すべて無黒斑土師質焼成品であり、窖窯焼成による。

⑩大半の個体の断面をみると、断面の中央付近の色調は表裏面とはほぼ同様か若干灰色がつよい程度である。ただし、21は断面が表裏面よりもあきらかに暗色化しており、他個体とはことなる。

⑪板オサエ等の明確な底部調整の痕跡は確認できない。

編年上の位置づけ 以上の諸特徴をふまえて、編年上の位置づけを確認する。なお、編年は川西宏幸氏による編年案（川西 1978 以下、川西編年）・埴輪検討会編年（埴輪検討会 2003a・b 以下、検討会編年）にもとづく。

まず、④は川西編年Ⅱ期以降、検討会編年Ⅱ期—Ⅰ段階以降の特徴である。つぎに⑤の外表面調整であるが、ヨコハケが主体的であり、かつヨコハケのうちにB種ヨコハケが確認できる。B種ヨコハケは川西編年Ⅲ期～Ⅳ期、検討会編年のⅢ-Ⅰ段階～Ⅳ期-3段階の特徴である。さらに、⑧の突帯間隔設定指標としての凹線は、川西編年Ⅲ期・検討会編年Ⅲ-2段階以降に多用され、無指標方式に転換する川西編年Ⅴ期・検討会編年Ⅴ期-Ⅰ段階には一部をのこして減少する。⑨の窖窯焼成による土師質無黒斑焼成品は、川西編年Ⅳ期・検討会編年Ⅳ-Ⅰ段階以降の特徴である。さらに⑪の板オサエによる底部調整は川西編年Ⅴ期・検討会編年Ⅴ期-Ⅰ段階以降に顕在化する要素である。

以上の諸属性の時間的重複関係から、本資料は川西編年Ⅳ期・検討会編年Ⅳ-Ⅰ～3段階に該当するとかんがえる。**須恵器類との関係** 埴輪周辺から出土した須恵器については、西田 1992 に実測図が提示されているので、それに依拠して記述する（図2）。この須恵器蓋杯は、提示された図面を見るかぎり、杯Gのセットである。西田氏の指摘のとおり、円筒埴輪よりもかなり後出する事例—具体的には7世紀前半頃の所産であるとみるのが穏当であろう（田辺 1981）。

周辺の事例との比較 以上、埴輪の観察結果をふまえて、本資料の編年上の位置づけを検討した。その結果、川西編年Ⅳ期、中期後葉～末葉頃の所産と推定するにいたった。

当該期には、北東部の栗東市域に展開する安養寺古墳群のうちの新開1号墳（滋賀県教育委員会 1962）・椿山古墳（近藤 2017）・狐塚2号墳（雨森 1994）等で埴輪が出土している。そのなかでも、資料数に富む狐塚2号墳例と比較する。

狐塚2号墳は、栗東市安養寺に所在する埋没古墳である。径12mの円墳であるが、周溝内から大型の普通円筒埴輪・朝顔形埴輪等が出土した。この埴輪について、一瀬和夫氏は「応神陵古墳によく似て」おり、「栗太郡の人が応神陵

古墳の埴輪の生産にも手伝いに出向いた」可能性を指摘する（11）。つまり、政権中枢部の埴輪製作者から直接的な技術伝習を受けた人物が製作にあたった可能性があることになる。

それに比して、本資料の製作者については、突帯間隔設定手法・B種ヨコハケを採用する点で当該期の埴輪の技術的情報を見知った人物を想定できる。一方で、規則的とはいいがたいB種ヨコハケの施工方法、底部付近に歪みの生じた例がまみられることや、総じて器厚がぶ厚い等の点に埴輪製作の練度の低さが垣間見られる。また、朝顔形埴輪の口縁部については、狐塚2号墳例もふくめて当該期の中枢部の埴輪の場合、一次口縁と二次口縁にわけて成形されるのが通有である。しかし、本資料の事例（6）では一括成形しており、この点で両者は技術的に相違する。

このようにわずか1例のみではあるが、近隣の同時期の埴輪資料と比較すると、本資料の製作者はB種ヨコハケの技術を習得してはいるけれども、狐塚2号墳の埴輪製作者のように政権中枢部の埴輪製作者もしくはそれに準ずる製作者であったとは見なしがたく、両者の製作者はあきらかに相違する。ただ、この点については、両者の時期差を反映する可能性も否定できないので、比較対象をさらに増加させたうえで、今後にあためて検討をこころみたい。

6. 遺構の検討

調査者の解釈 この「埴輪列」について、調査者である西田氏は、古墳とみなすには確たる痕跡がないこと、その一方で他の機能を埴輪列がはたしたとみることも困難であるなどとして判断を保留した（12）。このような調査者の慎重な姿勢を尊重しつつ、今回現地で作成された出土状況図を見いだせたので、それに依拠して、埴輪の出土状況を見なおしたい。

二つの解釈案 本資料の出土状況については、西田氏も仮定したものいずれかを確定できなかった以下の二つの解釈案がある。

①古墳の埴輪列だったが、なんらかの理由で古墳本体はうしなわれ、埴輪列のみが一部遺存した。

②そもそも古墳にともなう埴輪列ではなく、それ以外の用途で埴輪列が配置された。その機能としては、墓域を区画す等を想定できる。

原位置をとどめた「埴輪列」か 両案はいずれも埴輪列であることを前提とする。しかし、出土状況から埴輪列—すくなくともその一部が原位置をとどめる—といえるのであろうか。この点については、出土状況図とともにしめされた断面図（図2）が手がかりとなる。

図2の断面図にしめされた「埴輪出土レベル」は、地山と目される下端ラインに接するのではなく、そこから約0.2～0.3m上方にある。その視点で写真1をみると、やはり埴輪片が床面よりも「浮いた」状態にあることを看取でき

る。これは、埴輪は表土中であって、表土層形成過程でその場所に移動したことを、つまり原位置ではない可能性を示唆している。とはいえ、北西群などでは、17・19として取り上げた破片から2段目付近まで復元可能な個体（図4-16・17）があったり、29として取り上げた破片でも底部付近まで復元できる個体（図4-18・19）があったり、たしかにある程度まとまった状態で出土している。しかし、図4-19の場合、17と28の破片が接合しており、破片の移動が確認できる。さらに、北西群であっても、図4-16～19以外は、破片が少量・小片であるし、南群・北群はそれにもみえない状態である。となると、埴輪列がそのまま（原位置にある程度とどめつつ）倒れこんだ状況とはみなしがたいのである。

以上から、L地点の埴輪は、出土場所（ないしその付近）に配置されていた「埴輪列」ではなく一つまり原位置をとどめておらず一ある段階でさほど遠くない地点から人為的に出土地点に移動された一たとえば抜きとって投棄された一可能性があるとかんがえておきたい。

小 結 これが妥当だとすると、埴輪出土地点に埴輪列が存在したとかんがえる必要はなくなる。そのうえで、L地点の埴輪について解釈することになる。ここでは、L地点の西方にあるK地点に埴輪を配置した中期古墳があって、その裾部付近の埴輪列をある段階で意図して抜き取り、東側に投棄した結果、L地点での出土状況が形成されたという試案を提示しておきたい（13）。

7. おわりに

以上、ながらく注目されてこなかった北谷古墳群 L 地点出土埴輪について、その内容をあきらかにし、埴輪の位置づけをこころみた。さらに、出土状況について、あらたに確認できた出土状況図等を検討することにより、遺構の解釈に試案を提示した。

北谷古墳群にかんしては、中司・川西両氏によって前期古墳である11号墳の評価がなされ（中司他1980）、今回中期古墳が存在する可能性をL地点出土埴輪から推定した。本稿で取りあつかえなかった複数の後期古墳についても、西田氏が2001年に内容を公表したものの、石室構造・出土遺物等をはじめとする諸課題がのこされており、それらを再検討する必要がある。この点については、稿をあらためて論じることを期して、ひとまず本稿をおえることにしたい。

【謝辞】

本稿の執筆にあたっては、滋賀県立安土城考古博物館には、資料実見と実測にあたりご高配をたまわったうえに、成果の公開を許可いただいた。また、大津市歴史博物館には西田弘氏関連資料の資料調査を承諾いただくとともに、成果の公開をお許しいただいた。さらに、下記の方々からは、資料調査にさいして多大なる

ご配慮いただいたほか、貴重なご教示をたまわった。しるして深謝申しあげる。（敬称略・五十音順） 小島孝修・寺島典人・福庭万里子・藤崎高志

註

- (1) 近江地域の円筒埴輪研究の端緒といえる川西宏幸氏の業績（川西1978）でも、近江地域の円筒埴輪研究の専論である前川隆平氏（前川1987）の研究や細川修平氏の研究（細川1994）のいずれにおいても、本資料は取りあげられていない。また、1987年に滋賀県埋蔵文化財センターが開催した研究会「滋賀県の埴輪」では県内の埴輪出土事例が集成され、その成果が稲垣正宏氏等によって公開されたが、本資料については北谷11号墳と併記されるものの、出土の事実以上の情報提示はなかった（稲垣他1990）。
- (2) 本章の記述は『概報』のほか、調査担当者である西田弘氏の再整理報告（西田1992）と講演内容（西田2001）にもとづく。
- (3) 戦前に刊行された『近江栗太郡志』には「山寺の古墳」と題して、「志津村大字山寺の山中には所々に簡単な古墳在り、時々刀剣陶器などを掘出せり、村に入らんとする右片に瓢形の大古墳らしきものあり、栗太志に 此村ノ所々古塚多シ、覚音寺ノ葬ル所ナルベシ。 と見え所々に古墳存在するを記す」（中川編1912、p35）という記述がある。また、『滋賀縣史蹟名勝天然紀念物概要』（滋賀縣史蹟名勝天然紀念物調査會1936）には、「同郡〔引用者註：栗太郡〕志津村山寺字北谷山林に散在。圓墳二十、この外に既に発掘した迹が多い。何れも小規模なもので出土品も祝部土器金環の外はない」（p.73）とある。いずれも、はやくから古墳の存在が周知されていたことをしめす史料といえる。とくに、後者からは、円墳が20基程度存在したこと、この段階で破壊を受けていた例がすくなくなかったことなどがわかる。
- (4) 以下、横穴式石室にかんする以下の記述では、奥壁側から羨道側をみて、左右を呼びわけている。
- (5) 当該地点は当初12号墳（地点）と仮称されていた。また、L地点に関係する記述の初見は昭和35年8月17日である。よって、L地点は第3次調査の調査対象であったことがわかる。
- (6) 当時のかぎられた条件下で調査を遂行された、西田氏をはじめ調査関係者の尽力にたいして敬意を表したい。
- (7) 11号墳については、その後の中司照世・川西宏幸両氏によって再検討がなされ、遺構実測図・遺物実測図が提示されている（中司他1980）。
- (8) 色調は『新版標準土色帖』（小山他編著2004）のマンセル表示法によることを基本とした。
- (9) 以下の記述において、口縁部高は最上段突帯上辺から口縁部までの距離、突帯間隔は下位突帯上辺から上位突帯上辺までの距離、底部高は底端面から1段目突帯上辺までの距離を計測した。調整方法等の属性の定義・用語については、とくに明記しないかぎり、川西宏幸氏による論考（川西1978）を参考としたが、突帯間隔設定手法については拙稿（辻川2003b）にもとづく。

- (10) 静止痕角度とは、器体に正対して静止痕をみたさいに、垂直方向（0°）を基準とした左右への傾斜角度のことで、右の場合 R〇°、左の場合 L〇°でしめす。
- (11) 栗東市教育委員会・公益財団法人栗東市スポーツ協会編 2021 所収「討論 椿山古墳をめぐる」内での一瀬氏の発言内容（p.142）。
- (12) 西田氏は以下のように埴輪列の解釈をこころみた結果、最終的に判断を保留している。「埴輪は地山の直上にあり、付近には盛土等は認められず、尾根伝いの山道を画するかのように並んでおり、この埴輪列の性格は不明と言わねばならない。第一号墳と第一一号墳を結ぶ尾根道のちょうど中間点にあることから、両墳を中核にした二つの墓域を画する設備かとも考えたが、後期石室墳の分布は、L 地点から一号墳に向かっては、調査しただけでも八基と、極めて密に並んでいるのに対し、この地点より第一一号墳までの間には一基が確認されただけであり、二つの墓域を想定することは無理である。北谷古墳群は第一一号墳を中心として、その築造後長期にわたって築造された墓域と見るべきである。もちろん、この丘陵における墳墓は、丘陵の崩壊に伴って消滅した墳墓もあるだろうし、現在栗東町域となっている方面にも、丘陵先端部に近い墓地内の古墳や小槻大社境内古墳群などかなりの墳墓の存在が考えられる。したがって、この山寺町域内の土取りの対象となった北谷古墳群だけで、この丘陵全体の古墳群を推考すべきではないと思われる。このように見えてくると、現在ではこの埴輪列の意味は、筆者の浅学のためもあるが、不明として大方の御教示を待つこととする」（西田 1992、pp.100-101）。
- (13) ある段階の意図について参考となるのは、K 地点に「往昔仏堂があった」（西田 1961、p. 5）との言い伝えを調査者が地元の老人から聞き取っている点である。仏堂建設にさいして、K 地点が削平された可能性もあろう。

文献一覧（著者名・機関名 50 音順、刊行年順）

- 雨森智美（1994）「第 2 章 狐塚古墳群」『栗東町埋蔵文化財 1992 年度年報Ⅱ』財団法人栗東町文化体育振興事業団
- 稲垣正宏・上田佳子（1990）「滋賀県出土の埴輪資料集（その 1）」『紀要』4 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 川西宏幸（1978）「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 日本考古学会（川西 1988 に補訂収録）
- 川西宏幸（1988）『古墳時代政治史序説』塙書房
- 小山正忠・竹原秀雄編著（2004）『標準土色帳』日本色研事業株式

会社

- 近藤 広（2017）『椿山古墳発掘調査報告書 平成 28 年度 1 次調査』（栗東市文化財調査報告書第 127 冊）栗東市教育委員会・公益財団法人栗東市スポーツ協会
- 滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会編（1936）『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』
- 滋賀県教育委員会（1962）『滋賀県史蹟調査報告 第 12 冊』
- 滋賀県文化スポーツ部文化財保護課編（2022）『令和 3 年度 滋賀県遺跡地図』滋賀県
- 田辺昭三（1981）『須恵器大成』角川書店
- 辻川哲朗（2003a）「近江地域における円筒埴輪編年」『埴輪論叢』4 埴輪検討会
- 辻川哲朗（2003b）「突帯－突帯間隔設定技法」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』第 52 回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 中川泉三編（1912）「第貳編 石器及古墳 第十一章 山寺の古墳」『近江栗太郡志 卷壺』滋賀県栗太郡役所
- 中司照世・川西宏幸（1980）「滋賀県北谷 11 号墳の研究」『考古学雑誌』66-2 日本考古学会
- 西田 弘（1961）『草津市山寺町北谷古墳群発掘調査概報』滋賀県教育委員会事務局社会教育課
- 西田 弘（1992）「四、草津市北谷古墳群の調査」『平成 2 年度滋賀県埋蔵文化財調査年報』滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
- 西田 弘（2001）「草津市北谷古墳群の発掘調査について」西田弘先生米寿記念論集刊行会編『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と歴史』真陽社
- 埴輪検討会（2003a・b）『埴輪論叢』4・5
- 細川修平（1994）「埴輪から見た「近江」の古墳」『滋賀考古』11 滋賀考古学研究会
- 細川修平（1996）「栗太・野洲における後期古墳の類型的把握－古墳時代システム論への墓制的アプローチ－」『紀要』9 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 前川隆平（1987）「近江の円筒埴輪」『滋賀史学会誌』6 滋賀史学会
- 栗東市教育委員会・公益財団法人栗東市スポーツ協会編（2021）『5 世紀近江の盟主 椿山古墳の実像に迫る』サンライズ出版

（つじかわ てつろう：調査課 課長補佐）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.37 2024.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages